

## 柔道寝技における効果的な横返しの方向

高橋 怜 夢\* ・三戸 範 之\*\* ・石 井 直 人\*\*\*

Effective Direction of *Yokogaeshi* in Judo Groundwork

TAKAHASHI, Remu ; SANNOHE, Noriyuki ; ISHII, Naoto

## Summary

The purpose of this study was to examine the effective direction of *Yokogaeshi*. There are three directions for *Yokogaeshi*: toward the shoulder, directly to the side, and diagonally downward. In each direction, there are two grip positions: one grips the upper part of the collar, and the other grips the waist part of the judogi. The subjects were 15 university students who belonged to the Akita University judo team. They performed five different trials, and evaluated their performance using a 5-point scale. The analysis of variance demonstrated that the shoulder direction was effective for the grip at the upper part of the collar in both *Tori* and *Uke*. The diagonally downward was effective for the grip at the waist part of the judogi in *Tori*. The subjects were classified into two weight groups and the differences of evaluation scores in two groups were analyzed. The t-test demonstrated that in the grip at the waist for *Tori*, light weight players are effective in the shoulder direction, and heavy weight players are effective in the diagonally downward direction. In the grip at the waist for *Uke*, light weight players are effective in the shoulder direction. The findings of this study will contribute to the improvement of teaching methods for judo groundwork techniques.

**Key Words:** judo, groundwork, *Yokogaeshi*, direction, grip

## 1 はじめに

柔道の技は、投げ技、固め技、当て身技に分類される。このうち試合で使用できるのは、投げ技および固め技である。当て身技は安全への配慮から、試合では禁止されている。試合は、立ち姿勢から始まるが、立ち姿勢で投げ技が不十分のときなどは、立ち技から寝技へ移行し寝姿勢で固め技の攻防が必要である。そのため柔道では、投げ技と固め技、両方の技術を偏りなく向上させることが重要である。

固め技は投げ技に比べて軽視される傾向にあることが指摘されている(橋本, 1992; 徳田, 1961)。国際柔道連盟試合審判規定(全日本柔道連盟, 2018, p.17)で、「試合は常に立ち姿勢から始めなければならない」と定められており、寝技で進展がなくなると立ち姿勢から再開となる。試合では立ち姿勢による投げ技の攻防の時間が、寝姿勢による固め技の攻防にくらべ多いといえる。

試合時間の割合から、投げ技と固め技では、投げ技の技能が試合結果に及ぼす影響が高いことが予測できる。そのため柔道の練習時間は、立ち技の練習が寝技の練習にくらべ多いのが通常である。そのため、固め技を得意

としない選手やスタミナを温存するために試合で寝技を避ける選手もみられる。

固め技の判定では、抑え込み技は、抑え込みの状態が10秒以上20秒未満で技あり、20秒で一本である。抑え込み技、絞め技、関節技により参ったをしたとき、絞め技や関節技により戦意を喪失したときは、一本と判定する(全日本柔道連盟, 2018)。固め技は客観性が強い判断基準であるといえ、絞め技と関節技は技ありが無く、技の効果が認められたときはすべて一本となる。

これに対し投げ技は、審判の主観がより強く判定に影響し(尾形ら, 1977)、技の効果が認められても技ありと一本に分類される。判定の確実さや一本の可能性の高さから、投げ技だけでなく、寝姿勢の固め技において得意技を身につけることは、柔道技能向上のうえで重要であるといえる。

柔道固め技の方法に関する研究は、橋本(1988, 1992)の固め技の過程についての検討がみられる。橋本(1988)は、第2回福岡国際女子柔道選手権大会を対象に、寝技で一本となるのは試合後半に多いことや、伏せた相手への攻撃が多いことなどを明らかにした。また、橋本(1992)は第4回嘉納治五郎杯国際柔道大会を対象に、寝技への移行について日本選手は自分の技から自分の技への連絡、外国選手は相手の技から自分の技

\* 秋田県警察

\*\* 秋田大学教育文化学部 責任著者

\*\*\* 秋田工業高等専門学校

への変化が多いことなどを明らかにした。このように柔道固め技の方法に関する研究においては、戦術的な検討がみられるが、攻撃方法の技術的検討はみられない。

寝姿勢における固め技の攻防は2種類に大別できる。1つ目は、片方が仰向けの姿勢、および片方が膝を付いた姿勢・立ち姿勢となり2人がお互い向かい合って攻防する方法である。お互いが向かい合っているため、双方が攻撃と防御を行う。2つ目は、伏せて四つん這いもしくは腹這いとなって防御する相手を背部または頭頸部から攻撃する方法である。これは、攻撃側と防御側がほぼ固定されるため、攻撃側が大きく有利になる。

本研究では、伏せて防御する相手を攻撃する技術として、通称「横返し」（以下、「横返し」という）を取り上げたい。本研究の目的は、柔道寝技における効果的な返し方の技術として、横返しの効果的な方向を明らかにすることである。横返しにおいて取りが保持する受けの柔道衣の位置を「襟上部保持」と「腰保持」の2つに分類する。返すための取りの力の方向を「肩方向」、「真横方向」、および「斜め下方向」の3方向に分類する。本研究においては、2種類の保持の位置から横返しの効果的な方向を分析したい。

本研究は、柔道固め技の指導法の改善に貢献する運動学的研究である。

## 2 方法

### (1) 被験者

被験者は、柔道部所属の大学生15名、すべて柔道歴8年以上の柔道熟練者である。学年は、1年生5名、2年生4名、3年生6名である。予備実験を行い、被験者全員が対象の寝技、横返しの試技が可能であることを確認した。

### (2) 対象の寝技攻撃の技術

対象の寝技攻撃の技術は、横返しとする。大会ビデオ（全日本柔道連盟、2010；全日本柔道連盟、2011）により、予備調査を行い、トップレベルの大会で寝技攻撃の技術として横返しが用いられていることを確認した。また、大会ビデオでは、重量級の選手が横返しを多く用いていることを確認できた。

### (3) 返す方向、握りの位置の分類

返す方向は、肩方向、真横方向、および斜め下方向の3方向とする。握りの位置は、襟上部保持と腰保持に分類する。襟上部保持は柔道衣襟鎖骨付近を握ることとし、腰保持は柔道衣腰部分を握ることとする。

### (4) 手続き

体格が近い被験者2名ずつの組をつくり、横返しの試技を行う。試技は、襟上部保持で3方向に1回ずつ、腰保持で同じく3方向に1回ずつ行い、同じ組で取りと受けを交代する。

受けは四つん這いの姿勢で仰向けに返らないよう耐え、取りはこれを仰向けに返すこととする。試技終了後、被験者は取りおよび受けとも2種類の保持、3方向それぞれについて質問紙に回答する。

### (5) 質問紙

質問紙は、試技の後に、握りの位置「襟上部保持」、および「腰保持」における、返す方向「肩方向」、「真横方向」、および「斜め下方向」について、決まり方評価得点を回答する。質問紙における、横返しの決まり方の5段階評価は、「5とても効く」、「4効く」、「3どちらかといえば効く」、「2効かない」、「1まったく効かない」である。

### (6) 分析

襟上部保持と腰保持における、返す3方向の条件の効果は、分散分析により分析する。

また、被験者15名を、73kg級以下6名と81kg級以上9名の2つの体重のグループに分類する。これら2グループにおける、襟上部保持および腰保持における、返す3方向それぞれについて、評価得点平均をt検定により分析する。

## 3 結果

### (1) 襟上部保持

#### 1) 取り

表1は、襟上部保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、取りの決まり方評価得点の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、表2に示すとおり、条件の効果は有意であった（ $F(2, 28) = 29.619, p < .01$ ）。LSD法を用いた多重比較によれば、各条件の平均の大小関係は「肩>真横=斜め下」であった（ $MSe=0.741, 1\%$ 水準）。したがって取りにおいては、横返しの方向は、襟上部保持で、真横、および斜め下方向に比べ、肩方向が効果的であるといえる。

#### 2) 受け

表3は、襟上部保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、受けの決まり方評価得点の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、表4に示すとおり、条件の効果は有意であった（ $F(2, 28) = 16.205, p < .01$ ）。LSD法を用いた多重比較によれば、各条件の平均の大小関係は「肩>真横=斜め下」であっ

表1 襟上部保持取り決まり方評価の平均と標準偏差 (N=15)

	肩	真横	斜め下
$\bar{x}$	4.60	2.33	2.73
SD	0.63	0.62	1.03

表2 襟上部保持取り決まり方評価の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条件	43.911	2	21.956	29.619
個人差	13.867	14	0.990	
残差	20.756	28	0.741	
全体	78.534	44		p<.01

表3 襟上部保持受け決まり方評価の平均と標準偏差 (N=15)

	肩	真横	斜め下
$\bar{x}$	4.27	2.73	2.8
SD	0.80	0.80	0.78

表4 襟上部保持受け決まり方評価の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条件	22.533	2	11.267	16.205
個人差	11.867	14	0.848	
残差	19.467	28	0.695	
全体	53.867	44		p<.01

た ( $MSe=0.695$ , 1%水準)。したがって受けにおいては、横返しの方向は、襟上部保持で、真横、および斜め下方向にくらべ、肩方向が効果的であるといえる。

## (2) 腰保持

### 1) 取り

表5は、腰保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、取りの決まり方評価得点の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、表6に示すとおり、条件の効果は有意であった ( $F(2, 28) = 3.828$ ,  $p < .05$ )。LSD法を用いた多重比較によれば、各条件の平均の大小関係は「斜め下>真横」であった ( $MSe=1.608$ , 5%水準)。したがって取りにおいては、横返しの方向は、腰保持で、真横方向にくらべ斜め下方向が効果的であるといえる。

### 2) 受け

表7は、腰保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、受けの決まり方評価得点の平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、表8に示すとおり、条件の効果は有意でなかった ( $F(2, 28) = 2.121$ , n.s.)。したがって受けにおいては、横返しの方向は、腰保持で、肩、真横、および斜め下方向で、効果に差がないといえる。

表5 腰保持取り決まり方評価の平均と標準偏差 (N=15)

	肩	真横	斜め下
$\bar{x}$	3.40	2.60	3.87
SD	1.24	0.99	1.13

表6 腰保持取り決まり方評価の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条件	12.311	2	6.156	3.828
個人差	28.867	14	2.062	
残差	45.022	28	1.608	
全体	86.200	44		p<.05

表7 腰保持受け決まり方評価の平均と標準偏差 (N=15)

	肩	真横	斜め下
$\bar{x}$	3.47	2.93	3.87
SD	1.25	1.16	0.92

表8 腰保持受け決まり方評価の分散分析表

要因	SS	df	MS	F
条件	6.578	2	3.289	2.121
個人差	23.800	14	1.700	
残差	43.422	28	1.551	
全体	73.8	44		n.s.

## (3) 体重の影響

表9は、横返しにおける73 kg級以下と81 kg級以上の体重グループによる決まり方評価得点の平均値と標準偏差を示したものである。

### 1) 襟上部保持

#### a. 取り

表9によると、襟上部保持による肩方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった (両側検定:  $t(13) = 0.32$ , n.s.)。したがって取りにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部保持による肩方向の効果に差がないといえる。

表9によると、襟上部保持による真横方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった (両側検定:  $t(13) = 0.00$ , n.s.)。したがって取りにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部保持による真横方向の効果に差がないといえる。

表9によると、襟上部保持による斜め下方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった (両側検定:  $t(13) = 0.30$ , n.s.)。したがって取りにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部

保持による斜め下方向の効果に差がないといえる。

#### b. 受け

表9によると、襟上部保持による肩方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 1.68, n.s.)。したがって受けにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部保持による肩方向の効果に差がないといえる。

表9によると、襟上部保持による真横方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 0.92, n.s.)。したがって受けにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部保持による真横方向の効果に差がないといえる。

表9によると、襟上部保持による斜め下方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 0.53, n.s.)。したがって受けにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、襟上部保持による斜め下方向の効果に差がないといえる。

### 2) 腰保持

#### a. 取り

表9によると、腰保持による肩方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意であった(両側検定:t(13) = 4.07, p < .01)。したがって取りにおいて、73 kg級以下が81 kg級以上に比べ、腰保持による肩方向が効果的であるといえる。

表9によると、腰保持による真横方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 0.74, n.s.)。したがって取りにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、腰保持に

よる真横方向の効果に差がないといえる。

表9によると、腰保持による斜め下方向における、取りの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意であった(両側検定:t(13) = 2.23, p < .05)。したがって取りにおいて、81 kg級以上が73 kg級以下に比べ、腰保持による斜め下方向が効果的であるといえる。

#### b. 受け

表9によると、腰保持による肩方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意であった(両側検定:t(13) = 2.62, p < .05)。したがって受けにおいて、73 kg級以下が81 kg級以上に比べ、腰保持による肩方向が効果的だと言える。

表9によると、腰保持による真横方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 0.18, n.s.)。したがって受けにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、腰保持による真横方向の効果に差がないといえる。

表9によると、腰保持による斜め下方向における、受けの決まり方、73 kg級以下と81 kg級以上の評価得点についてt検定を行なった結果、両群の平均の差は有意でなかった(両側検定:t(13) = 0.68, n.s.)。したがって受けにおいて、73 kg級以下と81 kg級以上で、腰保持による斜め下方向の効果に差がないといえる。

## 4 考察

### (1) 襟上部保持での効果的な返し方向

襟上部保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、決まり方評価得点について分散分析の結果、取りおよび受けともに、3方向の条件の効果は有意であった。襟上部保持の状態では、肩方向が、真横、およ

表9 横返し体重の違いによる決まり方評価の平均値と標準偏差

保持	方向	取り・受け	73 以下 N=6	81 以上 N=9	t 値	p
襟上部	肩	取り	4.67(0.52)	4.56(0.73)	0.32	n.s
	真横	取り	2.33(0.52)	2.33(0.71)	0.00	n.s
	斜め下	取り	2.83(0.75)	2.67(1.23)	0.30	n.s
	肩	受け	4.67(0.52)	4.00(0.87)	1.68	n.s
	真横	受け	2.50(1.05)	2.89(0.60)	0.92	n.s
	斜め下	受け	2.67(0.82)	2.89(0.78)	0.53	n.s
腰	肩	取り	4.50(0.84)	2.67(0.87)	4.07	p<.01
	真横	取り	2.83(1.47)	2.44(0.53)	0.74	n.s
	斜め下	取り	3.17(1.33)	4.33(0.71)	2.23	p<.05
	肩	受け	4.33(1.03)	2.89(1.05)	2.62	p<.05
	真横	受け	3.00(1.67)	2.89(0.78)	0.18	n.s
	斜め下	受け	3.67(1.03)	4.00(0.87)	0.68	n.s

び斜め下方向に返すよりも効果的であることが示唆された。

襟上部保持の状態で行うときは、握りの位置が相手の頸部に近く、肩の方向に返すことで、真横、および斜め下方向に比べ、受けの頸部へ圧力が強くかかると考えられる。また、国内における少年大会特別規程の改正では、「中学生の試合においては、絞技を禁止とし、施した場合には指導とする」（全日本柔道連盟、2022）と定められているが、横返しは絞め技ではない。したがって、襟上部保持による肩方向への横返しは頸部を圧迫するものの絞め技としての効果は少なく、一般だけでなく中学生以下においても有効な技であるといえる。

## （2）腰保持での効果的な返しの方向

腰保持による肩、真横、および斜め下方向各条件における、決まり方評価得点について分散分析の結果、取りにおいて3方向の条件の効果は有意であったが、受けにおいて3方向の条件の効果は有意でなかった。取りの3方向の条件の効果から、腰保持の状態では、斜め下方向が、真横方向に比べ効果的であることが示唆された。

腰保持で斜め下方向への横返しが効果的なのは、握りの位置が相手の腰部に近く、斜め下方向に返すことで、肩方向と真横方向に比べ、受けの腹部の隙間をなくすことができ、受けの腰部への圧力が強くかかると考えられる。

また、腰保持で斜め方向への横返しは、取りにおいて、柔道衣の腰部の縫い目に指を引っかけて握るとき、握りが緩まず力が伝わりやすくなると考えられる。若林ら(1989)は、「柔道選手の握りの基本は、小指側の三指を中心とした握り方であり、柔道選手の握力の特性として、他種目選手と比べて、握力が大きい」ことを明らかにした。腰保持での横返しは、腰部の縫い目を活用して小指側の三指を十分に作用させることができれば、いっそう握力を発揮し効果が高まると考えられる。

また、受けにおける方向の条件の効果が有意でなかったのは、肩、真横、斜め下どの方向でも、受けの腹部にかかる圧力に大きな違いを感じにくく、受けは効果の差の判断が難かったと考えられる。

## （3）横返しへの体重の影響

襟上部保持においては、肩方向、真横方向、斜め下方向いずれも、取り受けともに73 kg級以下と81 kg級以上の両群の決まり方評価得点の平均の差は有意でなかった。したがって、襟上部保持では、横返しの効果に体重は影響していないといえる。分散分析の結果と総合すると、73 kg級以下および81 kg級以上いずれにおいても、襟上部保持においては肩方向が効果的であると考えられ

る。

腰保持においては取りが、肩方向および斜め下方向で、両群の決まり方評価得点の平均の差が有意であった。取りの評価得点平均によると、肩方向は、73 kg級以下が81 kg級以上に比べ効果的であり、斜め下方向は、81 kg級以上が73 kg級以下に比べ効果的であることが示唆された。また、腰保持においては受けが、肩方向で両群の決まり方評価得点の平均の差が有意であった。受けの評価得点平均によると、肩方向は73 kg級以下が81 kg級以上に比べ効果的であることが示唆された。

また腰保持においては受けが、斜め下方向で両条件の決まり方評価得点の平均の差は有意でなかった。これは、73 kg級以下の選手と81 kg級以上の選手いずれにおいても、3方向どの方向に返されても、受けの腹部にかかる圧力に大きな違いを感じにくく、受けは効果の差の判断が難しかったと考えられる。

## （4）まとめ

本研究知見を総合的にとらえると、横返しで襟上部保持においては肩方向、腰保持においては斜め下方向が効果的であることが示唆される。体重差からは、腰保持においては、体重の軽い者は肩方向および斜め下方向、体重の重い者は斜め下方向が効果的であることが示唆される。

## 5 結論

柔道寝技の横返しを対象に、襟上部保持と腰保持における返しの効果的な方向を検討した。返す方向は、肩方向、真横方向、および斜め下方向の3方向とした。被験者は、柔道部所属の大学生15名、すべて柔道歴8年以上の柔道熟練者である。体格が近い被験者の組で、横返しの試技を行った。試技は、襟上部保持で3方向に1回ずつ、腰保持で同じく3方向に1回ずつ行い、同じ組で取りと受けを交代した。試合を意識させるために、受けは四つん這いの姿勢で力を入れて耐えるよう、取りはこれを仰向けに返すよう指示した。試技終了後、被験者は質問紙に回答した。質問紙は、試技の後に、握りの位置「襟上部保持」、および「腰保持」における、返す方向「肩方向」、「真横方向」、および「斜め下方向」について、決まり方の評価を回答する。質問紙における、横返しの決まり方の5段階評定は、「5とても効く」、「4効く」、「3どちらかといえば効く」、「2効かない」、「1まったく効かない」である。

質問紙の回答における決まり方の評価得点について分散分析を行なった結果、襟上部保持においては、取りと受けいずれも、肩、真横、および斜め下方向の3方向のうち肩方向が最も効果的であった。腰保持の場合は、取

りにおいてのみ、条件の効果は有意で、斜め下方向が真横方向に比べ効果的であった。受けにおいて条件の効果が有意でなかったのは、腰保持の状態を受ける場合、肩、真横、および斜め下方向のどの方向に返されても、腹部を圧迫されることが影響していると考えられる。

また、横返しへの体重の影響を検討するために、被験者15名を、73 kg級以下6名と81 kg级以上9名に分類した。取り受けとともに、襟上部保持と腰保持による3方向の横返しにおける決まり方の評価得点をt検定により検定した。

その結果、襟上部保持においては、肩方向、真横方向、および斜め下方向いずれも、体重の条件が有意でなく、横返しの効果に体重は影響していないことが明らかになった。分散分析の結果と総合すると、73 kg級以下および81 kg级以上いずれにおいても、襟上部保持では肩方向が効果的であるといえる。

腰保持においては、取りは肩方向および斜め下方向において、体重の条件が有意であった。肩方向は、73 kg級以下が81 kg级以上に比べ効果的であり、斜め下方向方は、81 kg级以上が73 kg級以下に比べ効果的であることが明らかになった。受けにおける、肩方向は、体重の条件が有意であり、73 kg級以下が81 kg级以上に比べ効果的であるといえる。受けにおける斜め下方向は、体重の条件が有意ではなかった。

本研究は、寝技横返しにおける、保持位置、体重の違いによる適切な返す方向についての知見が得られ、柔道固技の指導法の改善に貢献すると考えられる。今後の課

題としては、被験者数を増やすことや、体格差のあるペアの採用など実験条件の検討などがあげられる。

#### 参考文献

- 橋本年一 (1988). 女子柔道における寝技の行動形態と戦術に関する研究. 九州大学研究報告 人文・社会学, 37, 85-99.
- 橋本年一 (1992). 柔道競技における固技の成立過程の分析—第4回嘉納治五郎杯国際柔道大会を対象に—. 九州大学研究報告 人文・社会学, 41, 57-64.
- 松本芳三 (1994). 柔道のコーチング. 大修館書店
- 尾形敏史・山口隆 (1998). 中学校柔道大会における審判の判定について. 茨城大学教育学部紀要 教育科学, 47, 91-97.
- 竹内善徳 (1979). 柔道. 不昧堂出版.
- 徳田喜平 (1961). 四高を中心とした旧制高校柔道の練習実態と技術発展の変遷について. 体育学研究, 6 (1), 222.
- 若林真・貝瀬輝雄・森藤才・高橋進・矢野勝 (1989). 柔道選手の握力に関する研究—多種目選手との比較から—. 22 (2), 177-178.
- 全日本柔道連盟 (2010). 激闘の轍 全日本柔道選手権大会 昭和編.
- 全日本柔道連盟 (2011). 激闘の轍 全日本柔道選手権大会 平成編.
- 全日本柔道連盟 (2018). 2018-2020 国際柔道連盟試合審判規定.
- 全日本柔道連盟 (2022). 中学生の試合における絞め技の取り扱い並びに国内における「少年大会特別規程」への反映について.